

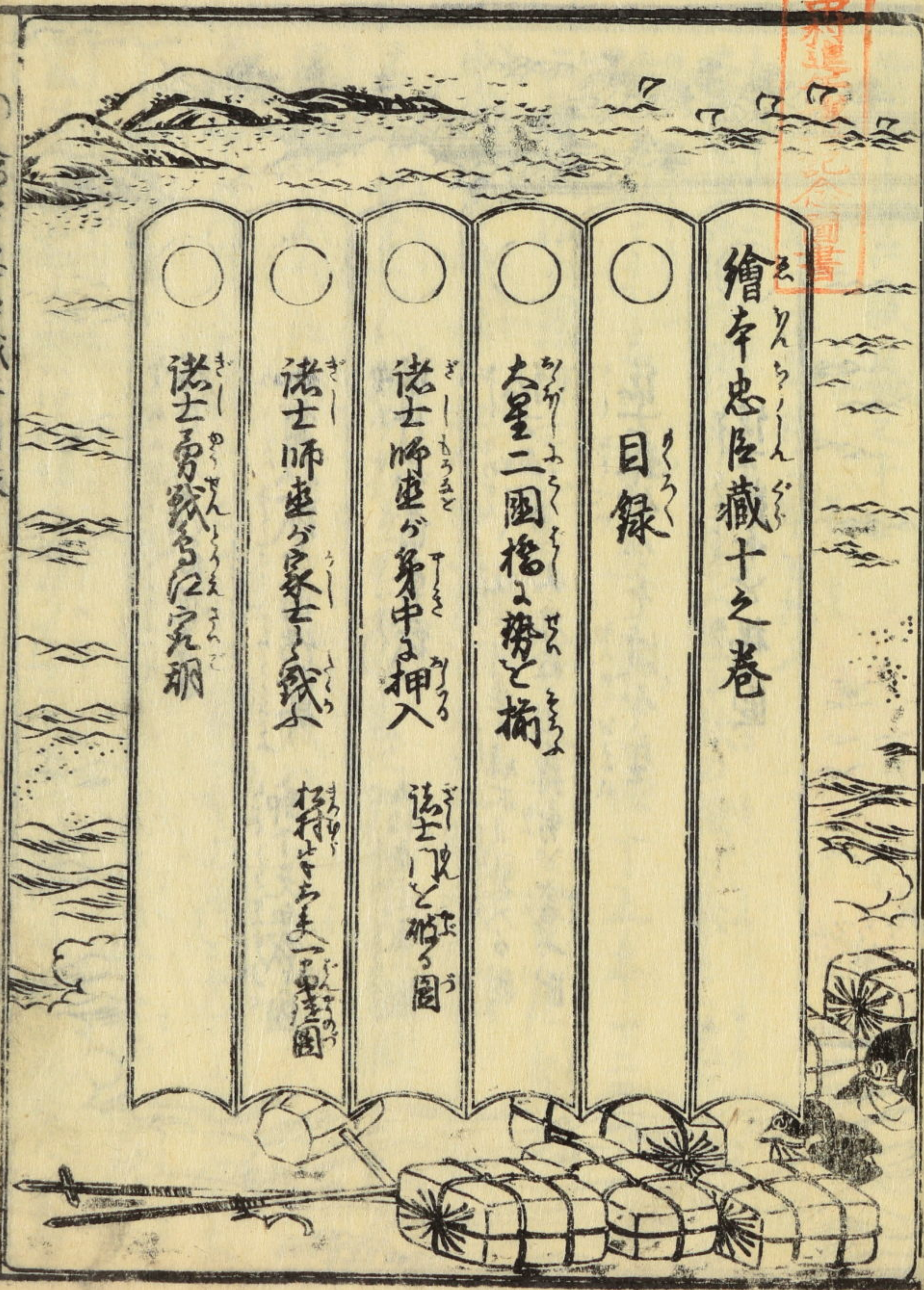


繪本忠臣蔵
十

中村進午文庫
文庫5
702
10



落葉集
元念圖書



繪本忠臣藏十之卷

目録

大星二國橋と橋と橋

徳士師座が身中を押し入

徳士師座が家士と戦ふ

徳士勇戦を江尻羽

徳士と橋と橋と橋

徳士と橋と橋と橋

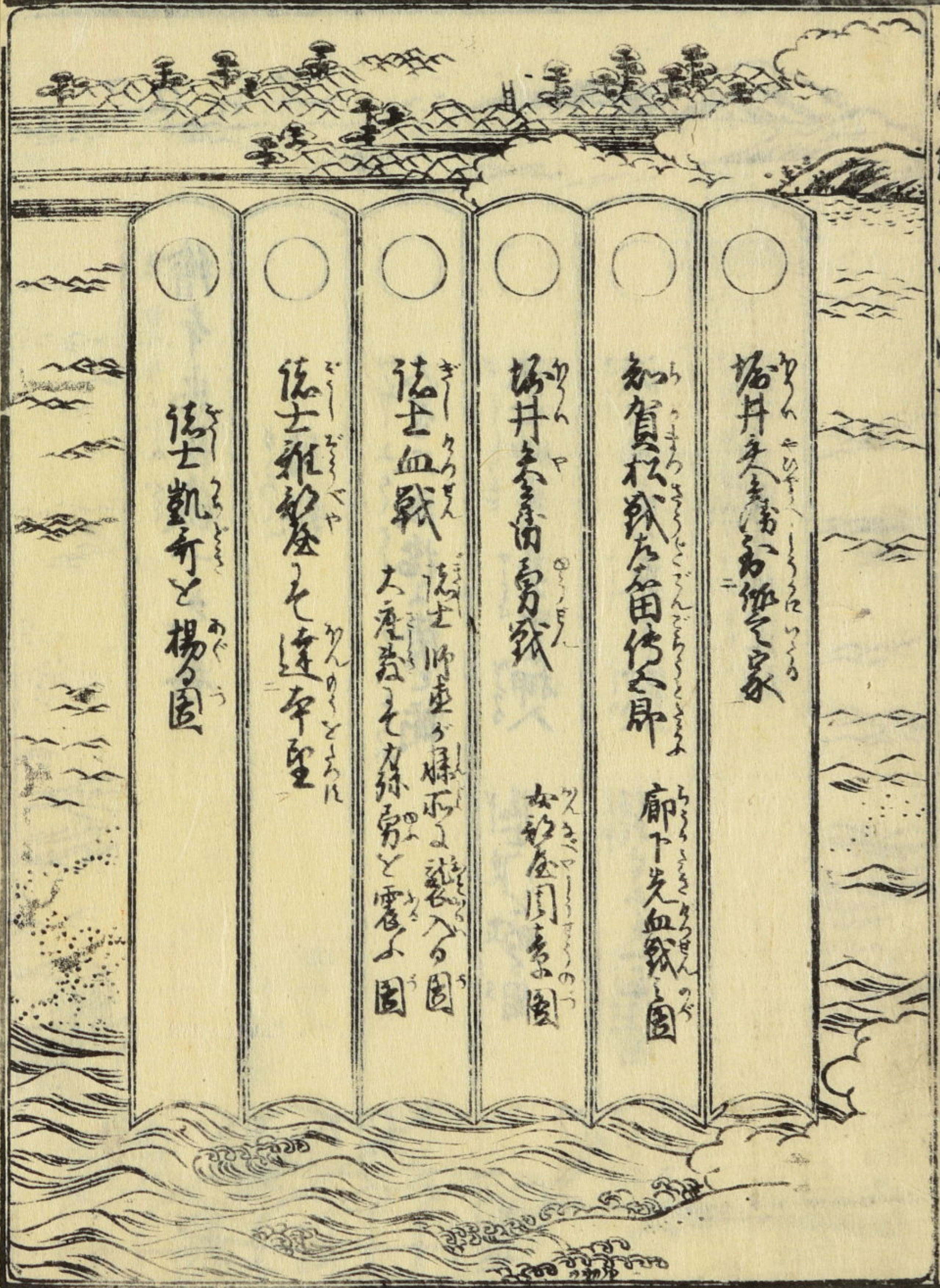
978
IV
513
支

所属 HK
部 中
番 2060 9690
小番 10

文庫5
702
10

昭和三十三年十一月二十七日
法華宗研究會より寄贈

昭和三十三年十一月二十七日
中村本天
贈



堀井夫直の御家

加賀松成左衛門守兵衛 廊下先血戦圖

堀井夫直の御家 女形全圖

徳士血戦 徳士師車が帰るに徳士入る圖 大座敷をそと外敷と雲の圖

徳士雅也をそと逢平屋

徳士凱新と揚る圖

信本忠臣藏卷之十

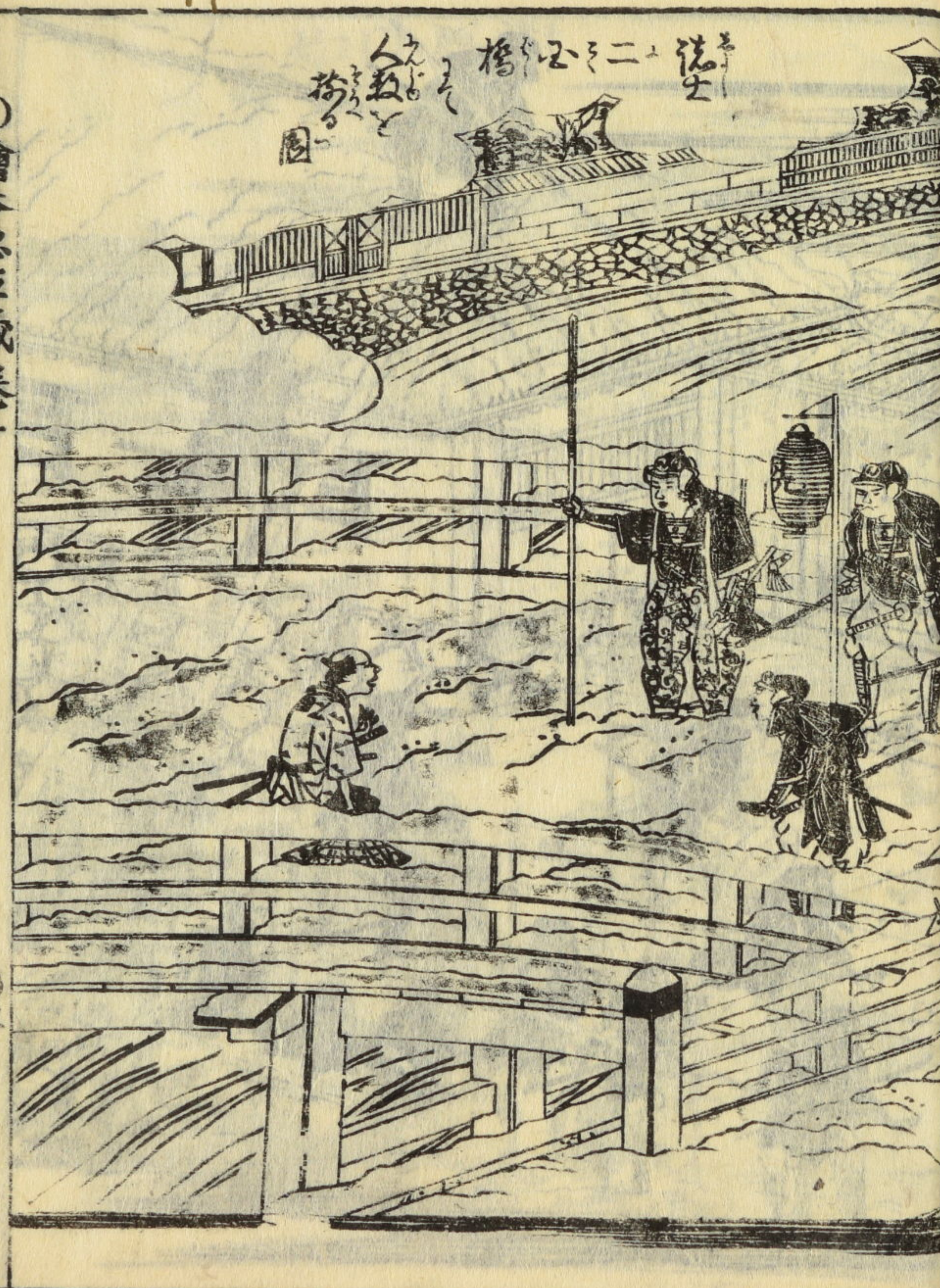
諸士二國橋の勢と掛

早稲田大学 図書館蔵書

信本忠臣藏

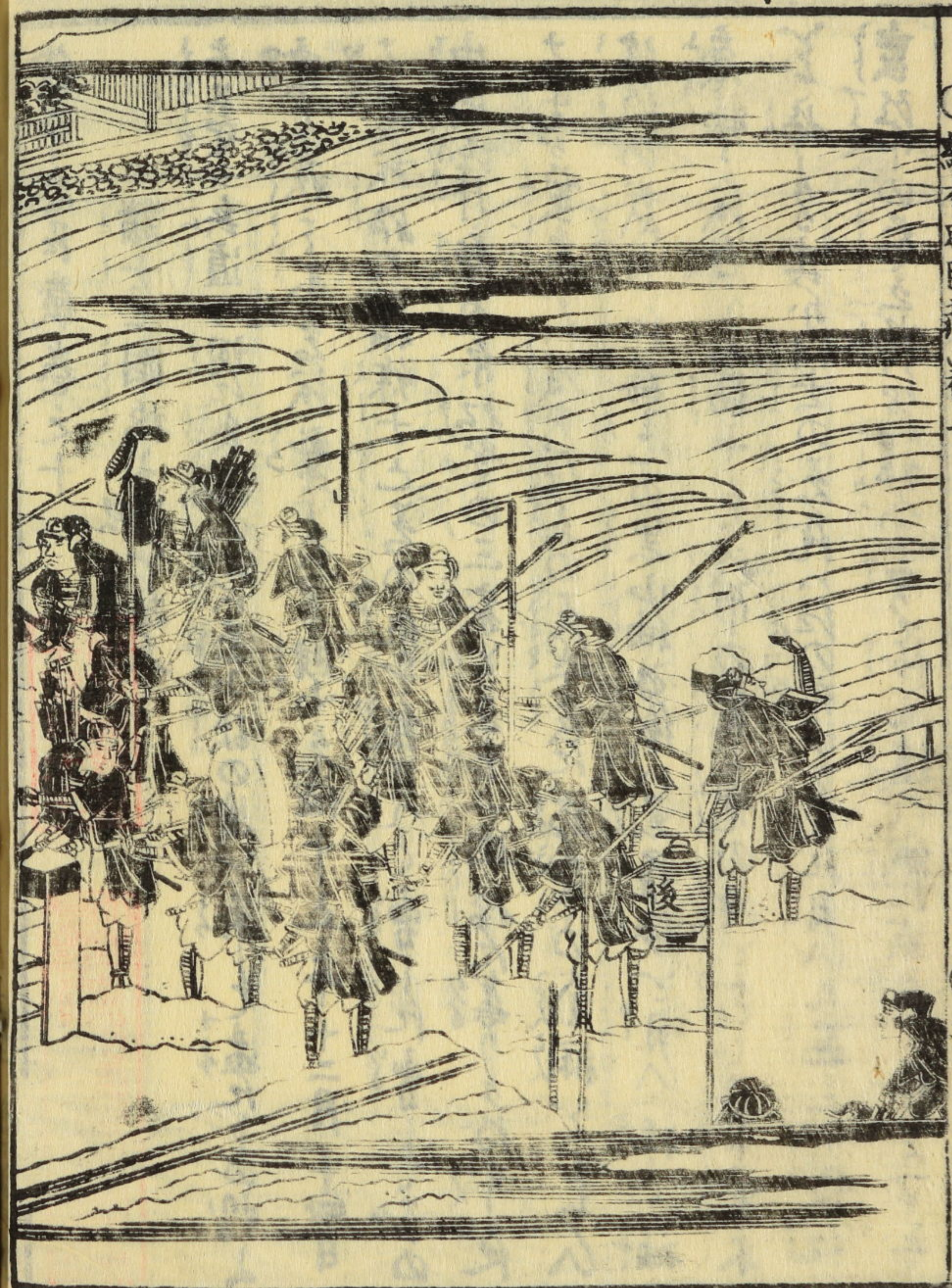
左の壁が兵道の河に兵衛の御小敷の機と来て遠たの州へ
来て疾く来たるは撃つる時小元徳十五年十二月十四日
大早稲田作り羅條士と若の仇と報せんと言ふは勇ましく
中別堀井摩直京松成の二家と之出二國橋た事り今今夜
大星が家来より後志仕立の足込妻に宿費の全額とやらん
は及の裁付紅梅と一の黒山袖好織の足雁沙と月入狂く袖
廣福と灰白く大筋中と江戸の妻と兜の汗と色く大早稲田
とどけり其れ同士の足花の紅の布と妻に月入大座敷小袖の紅
妻江戸の赤之物の羅條人より来て江戸遠く城に成りて極く人となり

信本忠臣藏卷之十



浄土二五橋
人教
橋

浄土二五橋



浄土二五橋

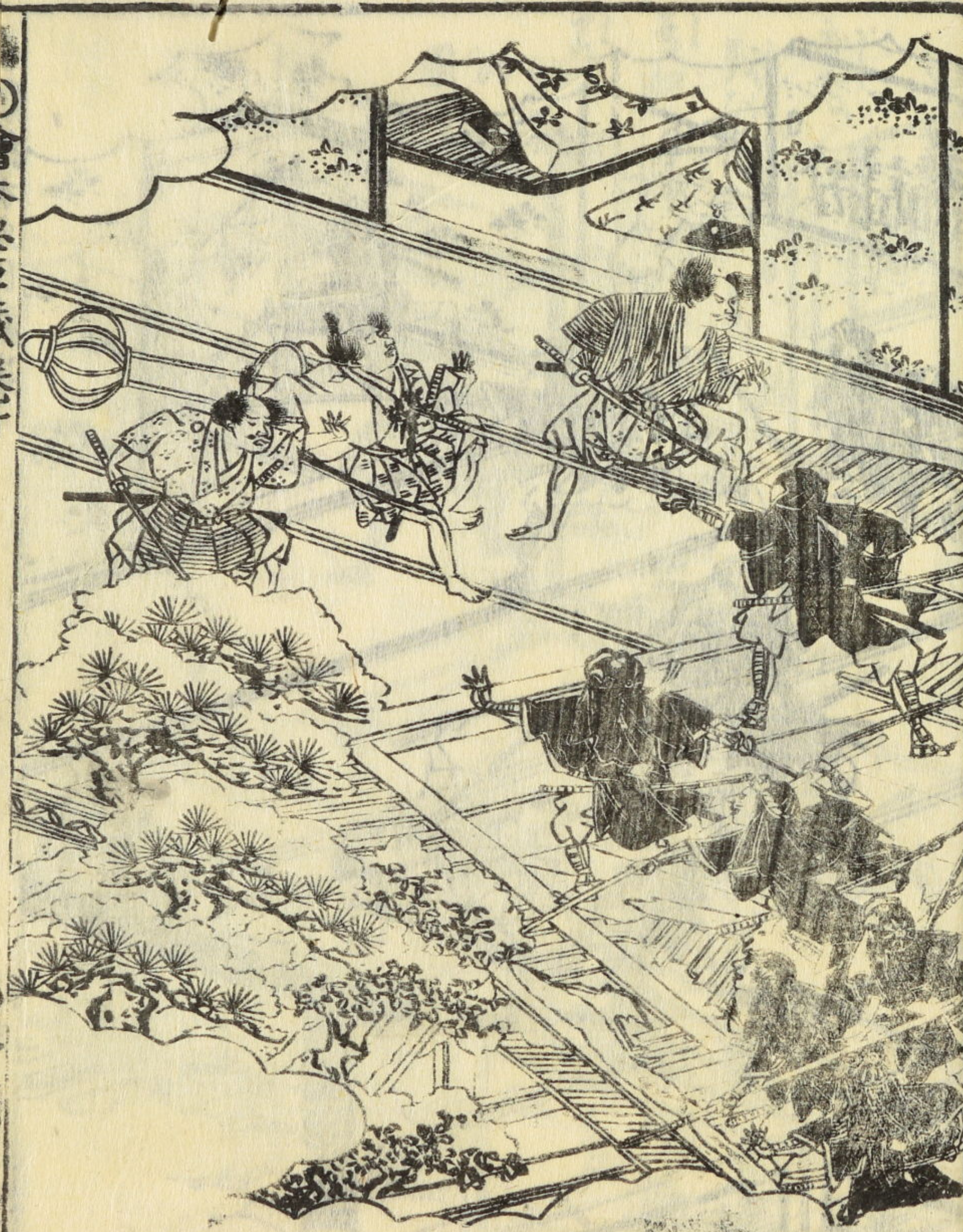
會不...

諸工師
之
門
之
圖



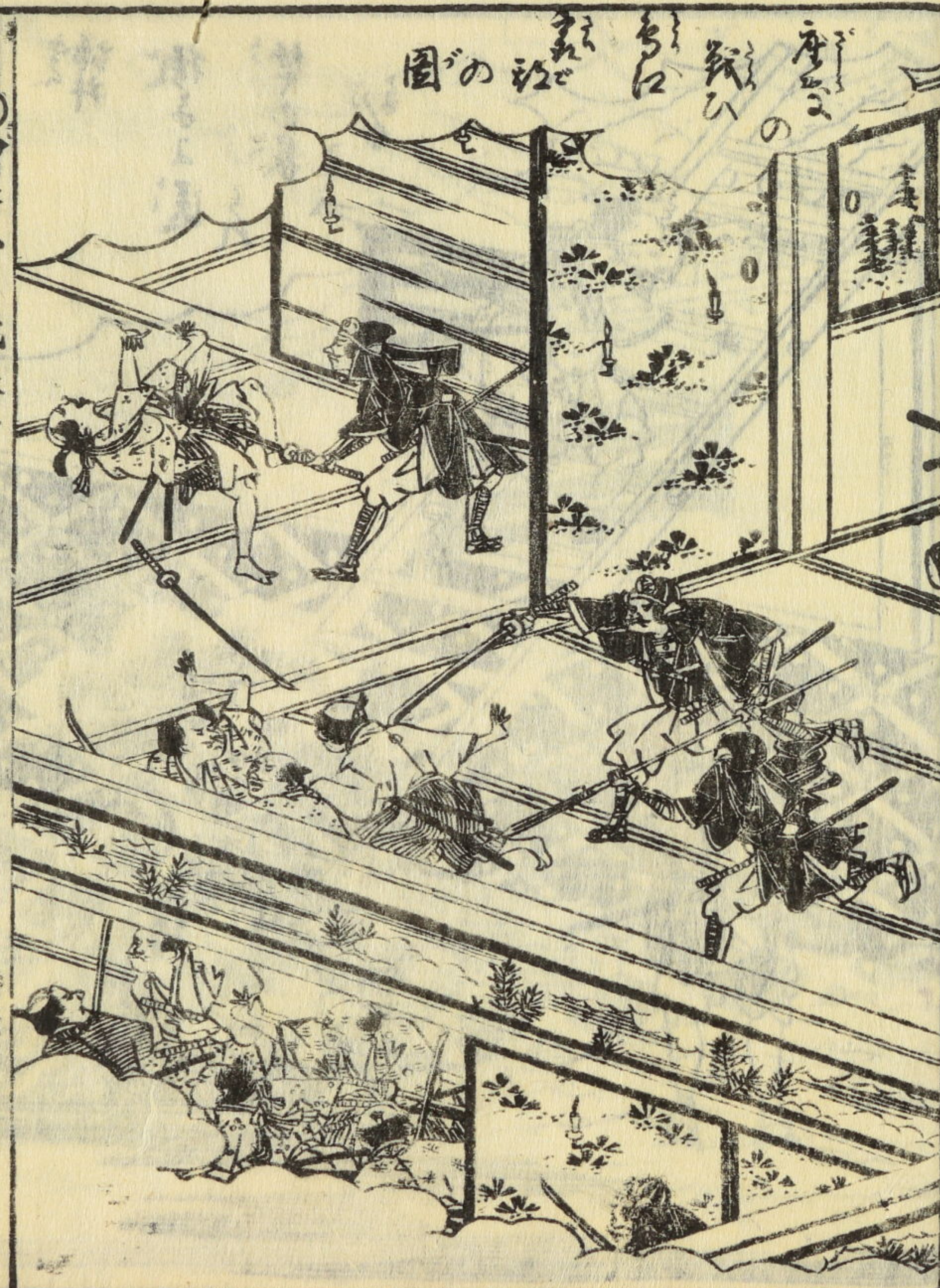
會不...



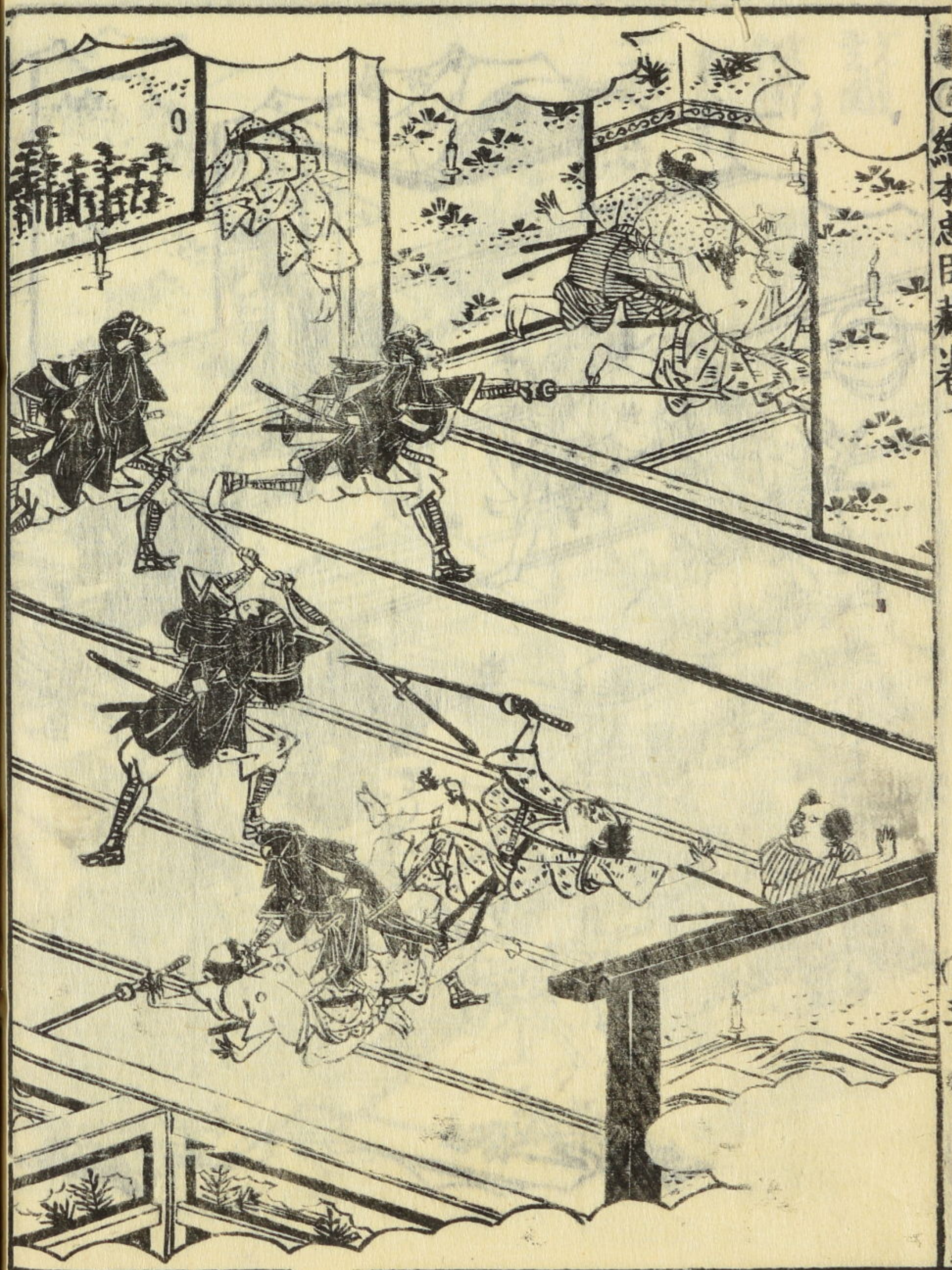


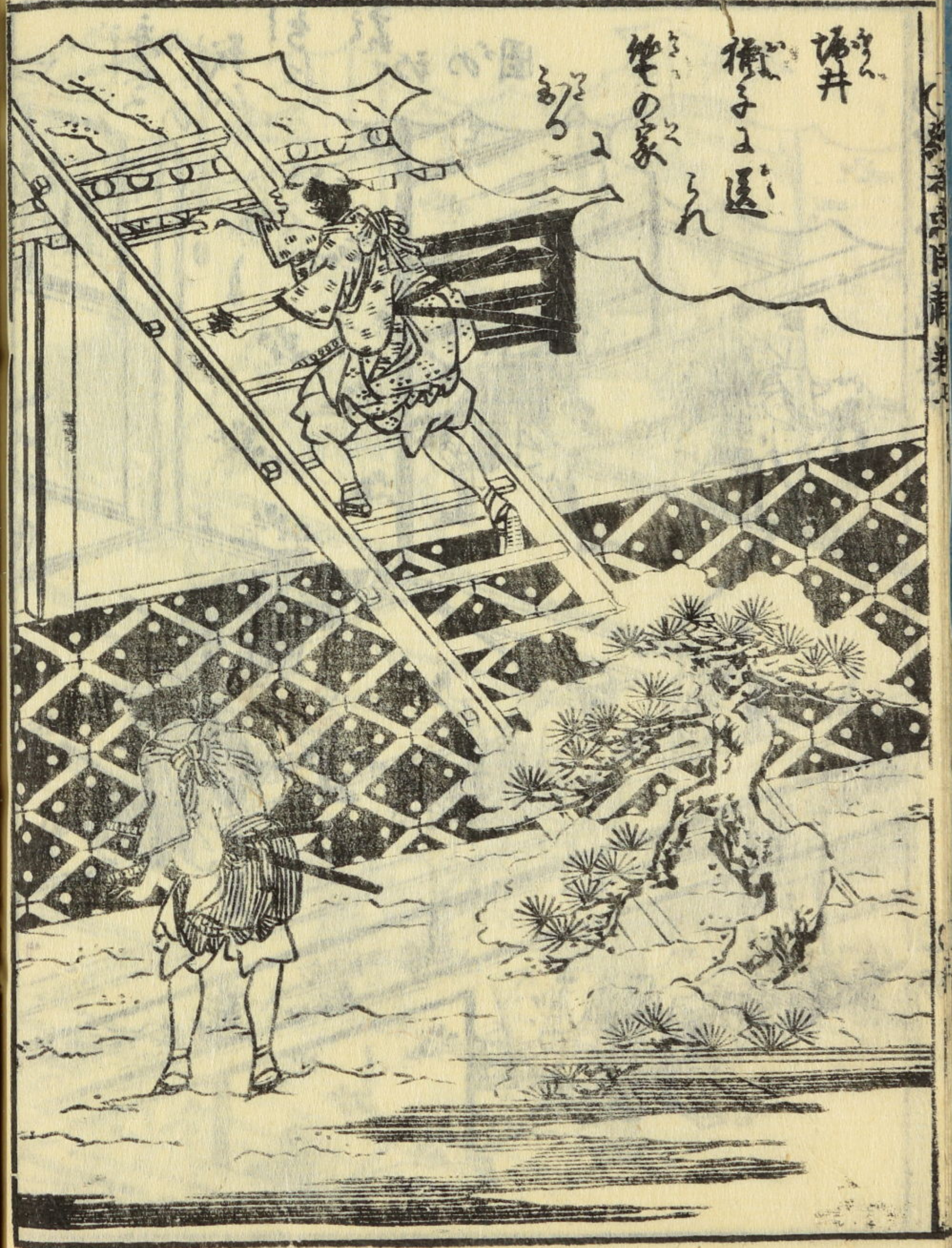
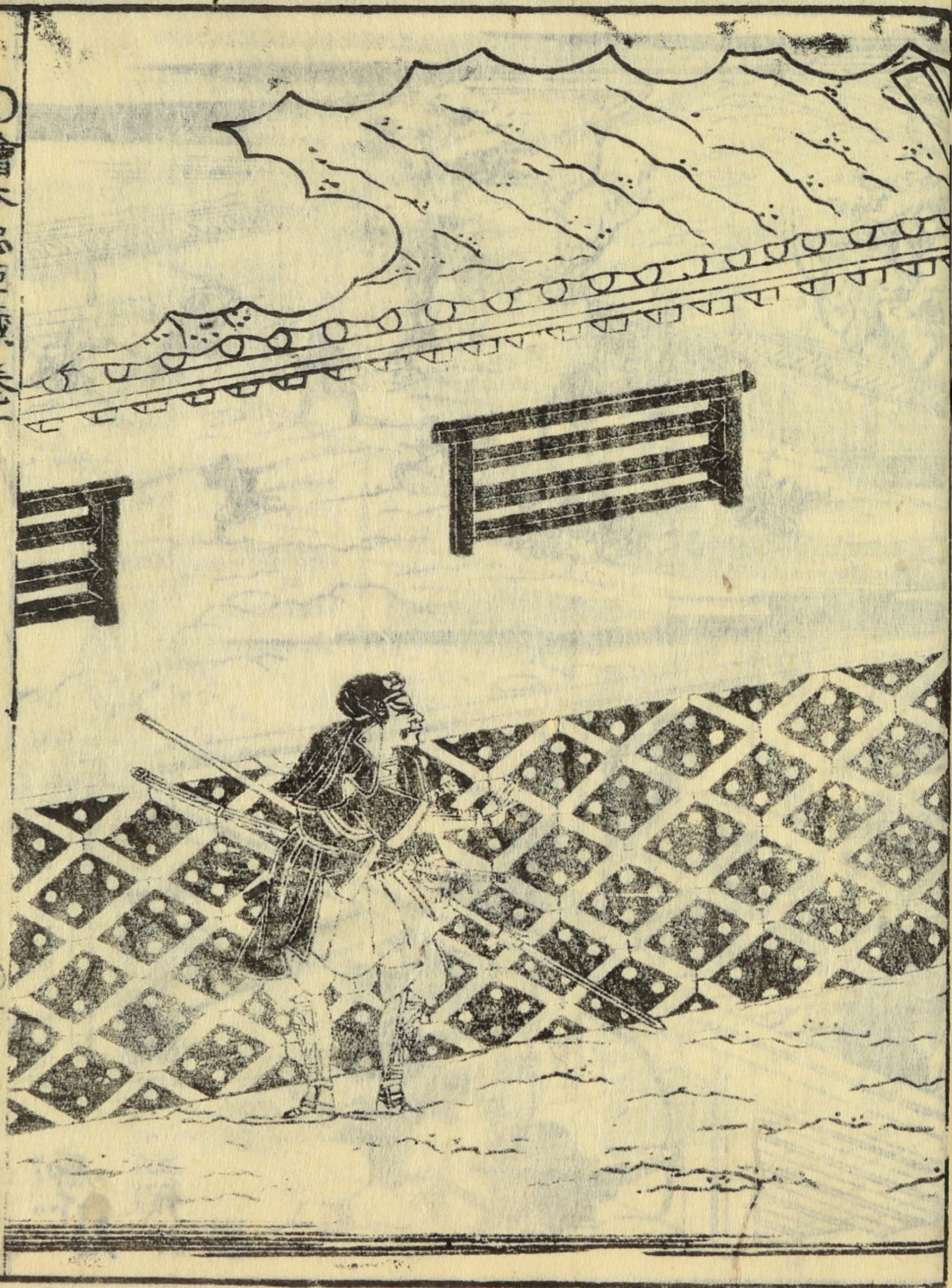
松村
くんと
一
海
の
一
の
一
の

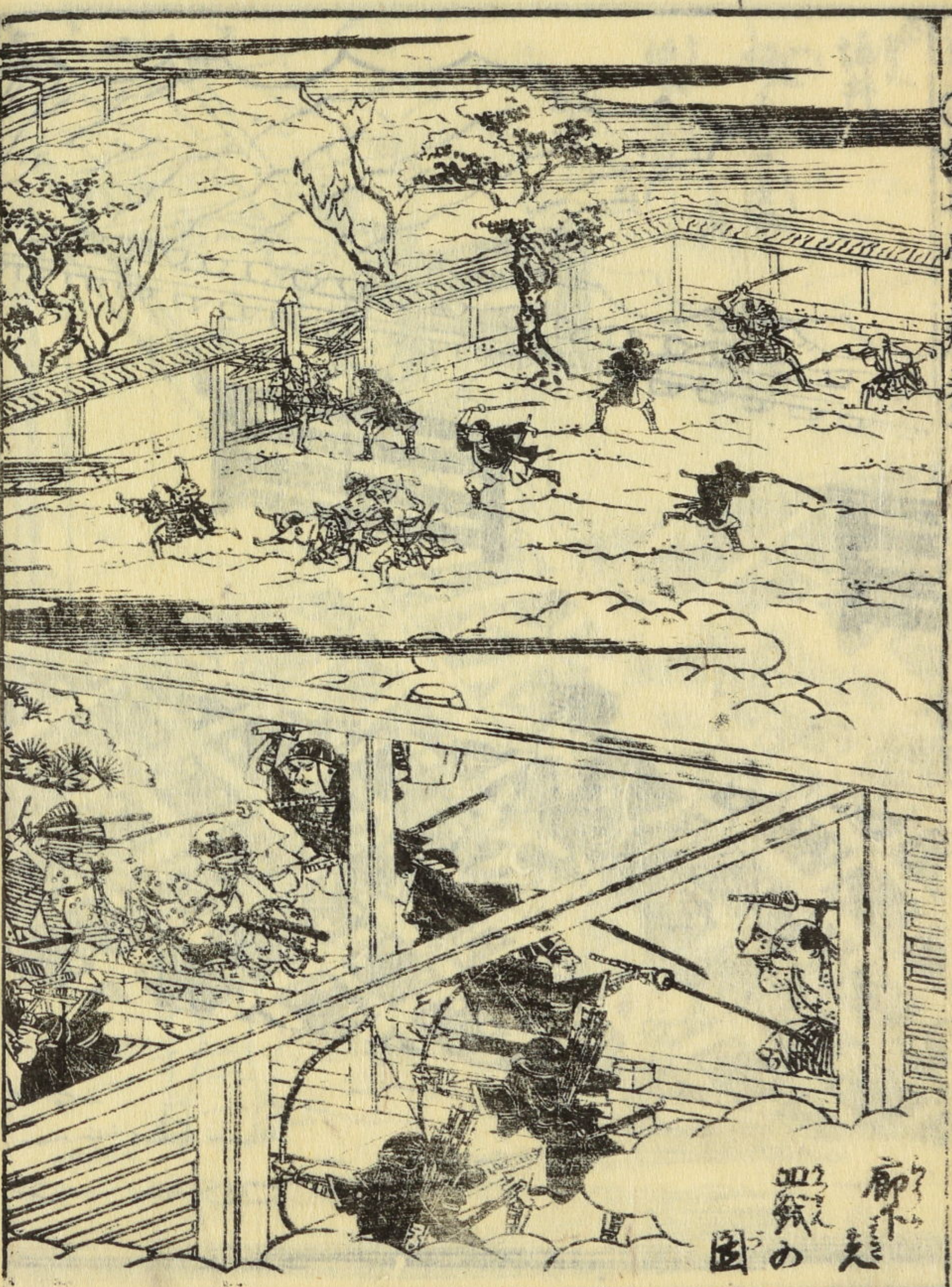
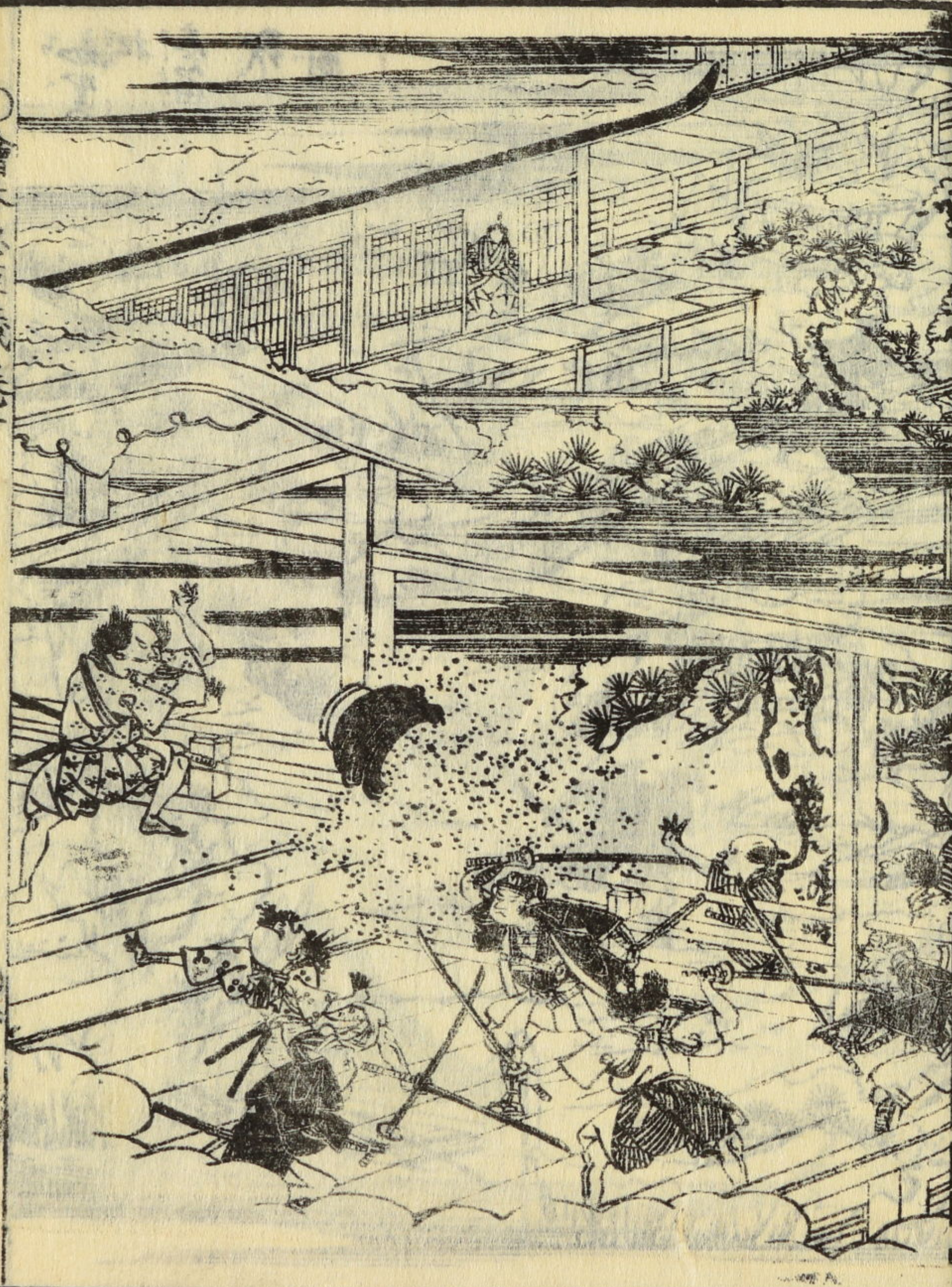
松村
くんと
一
海
の
一
の
一
の



源平の戦い 園の図







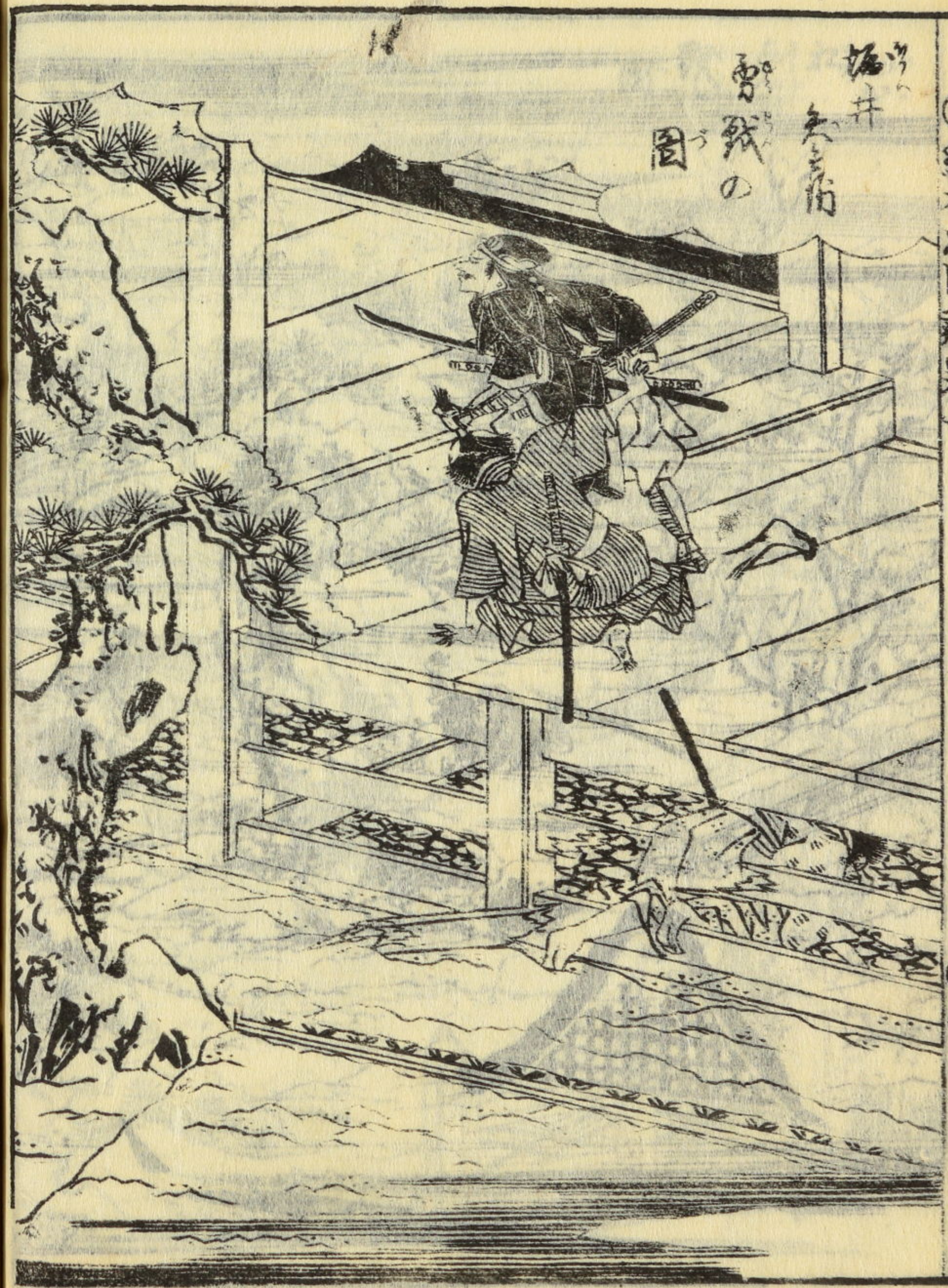
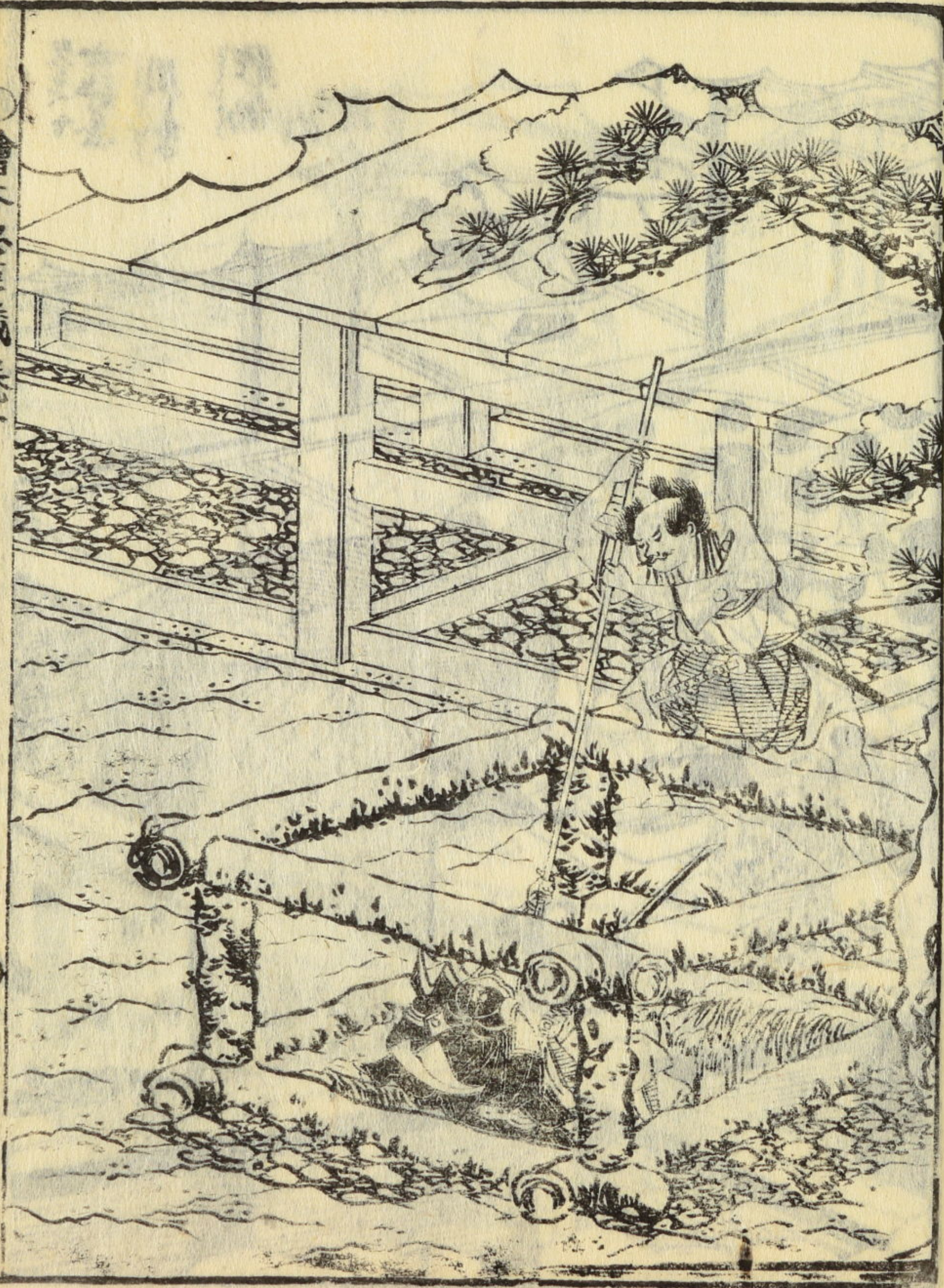
廊下の 人の 図

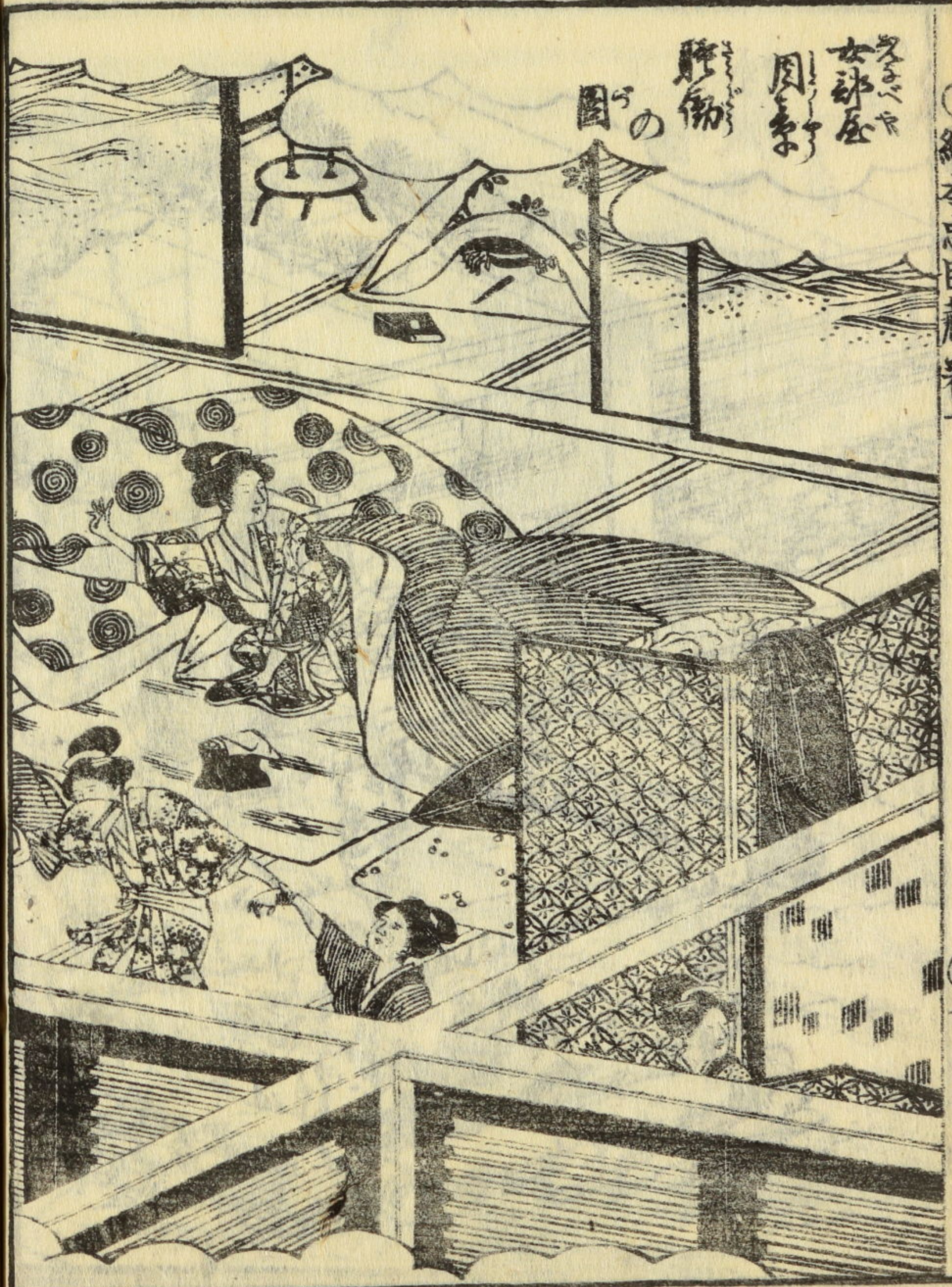
廊下の 人の 図



松如堂
左田
秋
園



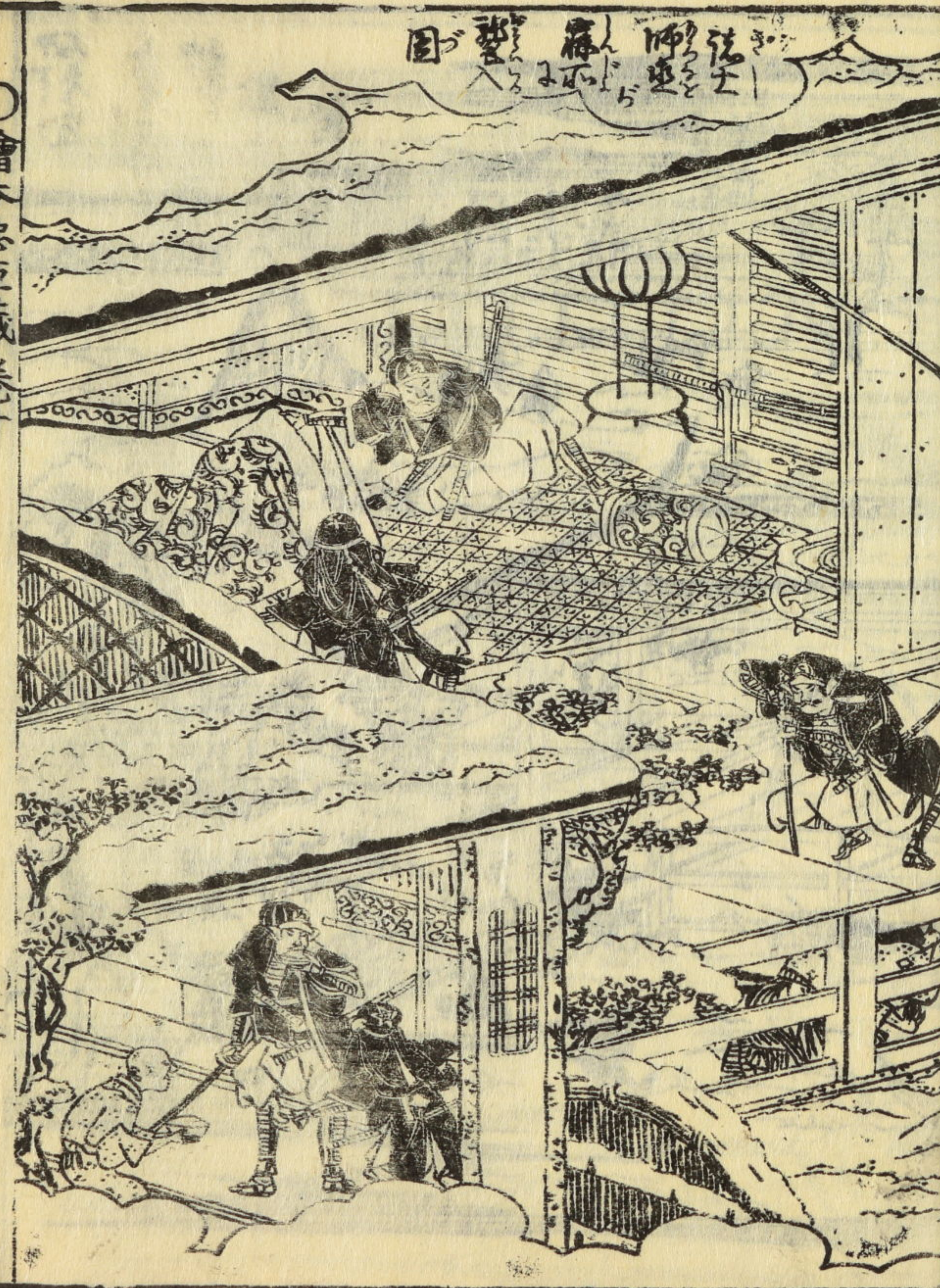




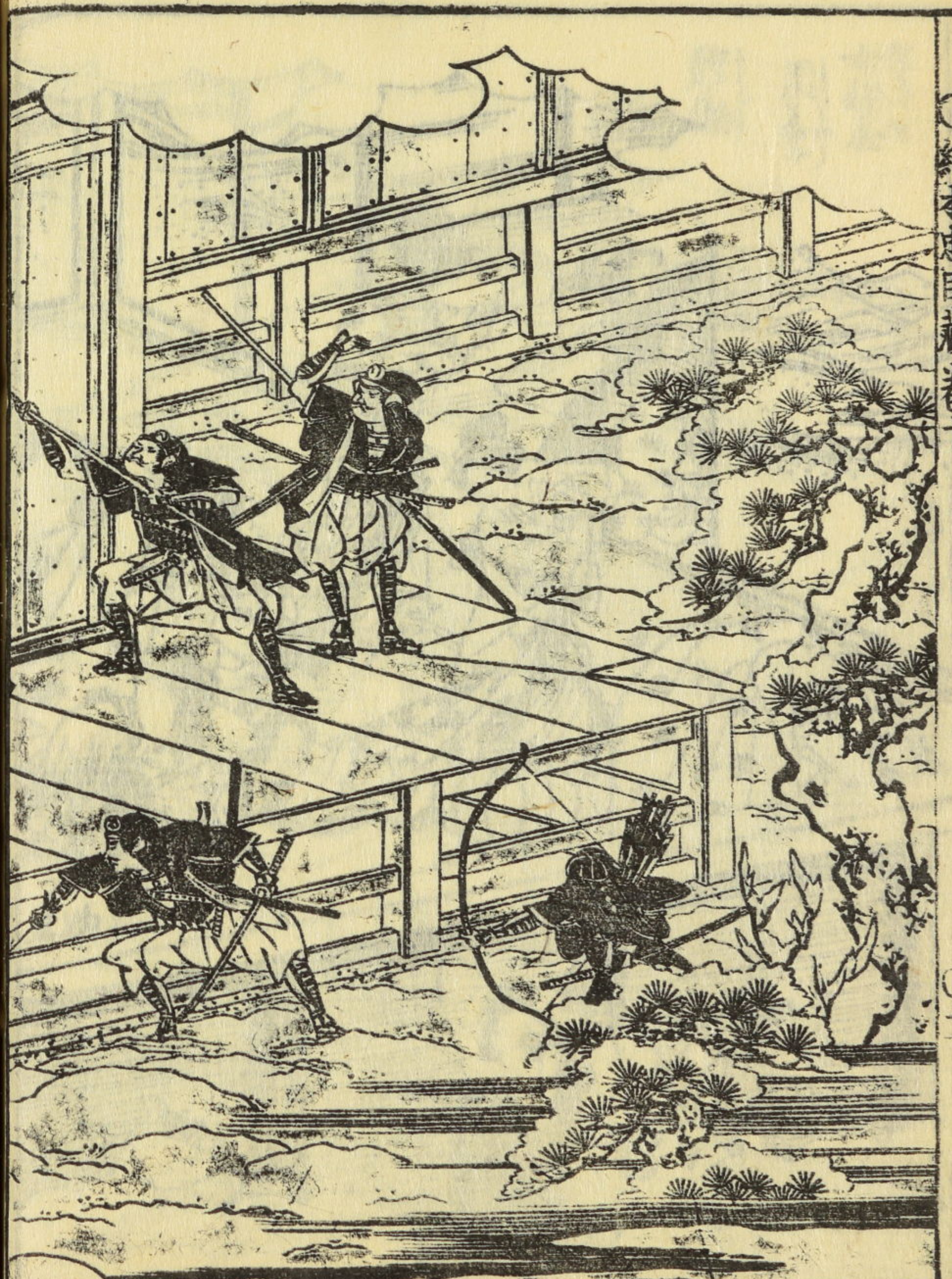
女部屋
月夜
の
勝傷

新編忠臣蔵

法王の師匠
藤原の御
入る

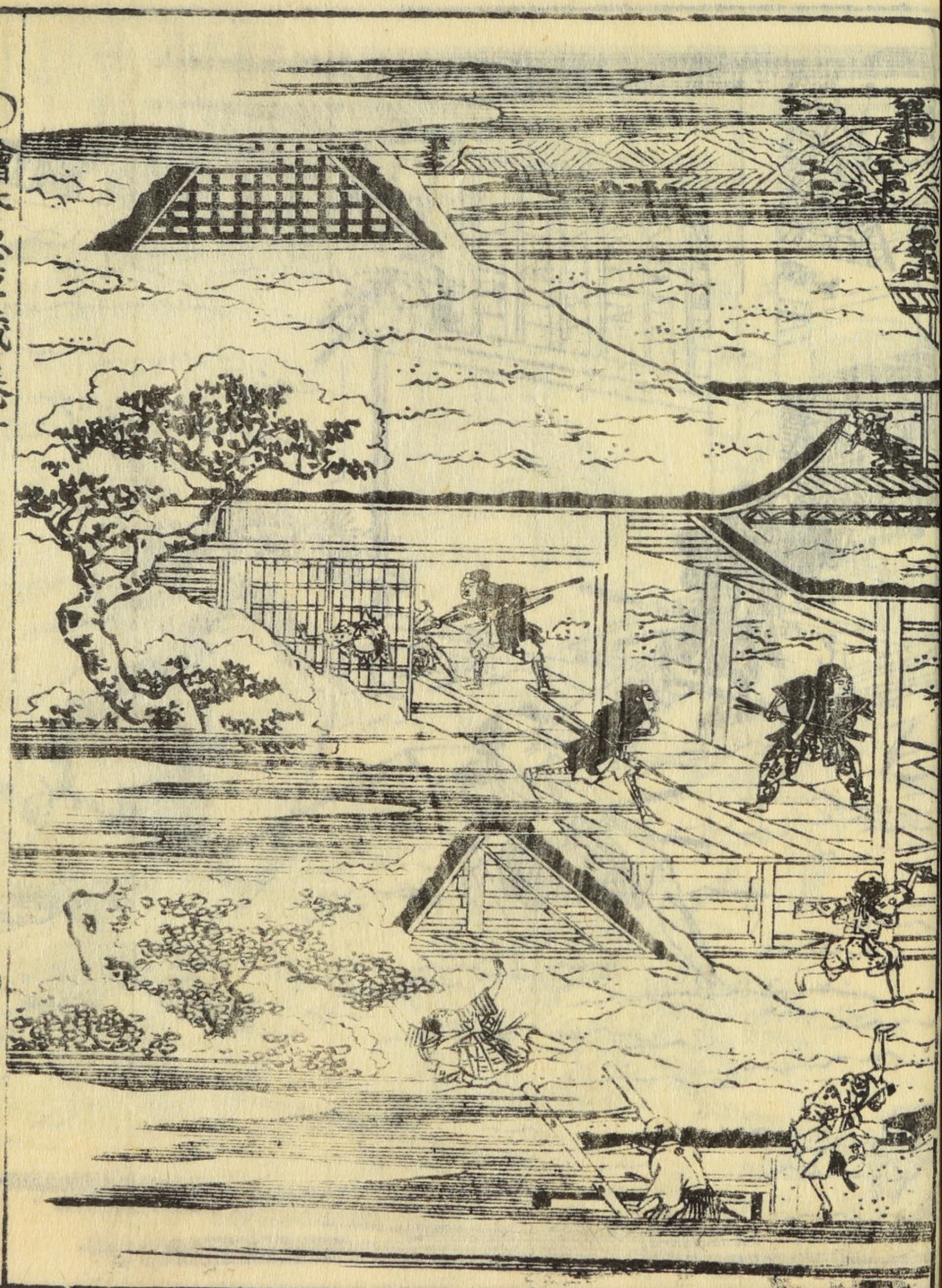


藤原の御入る

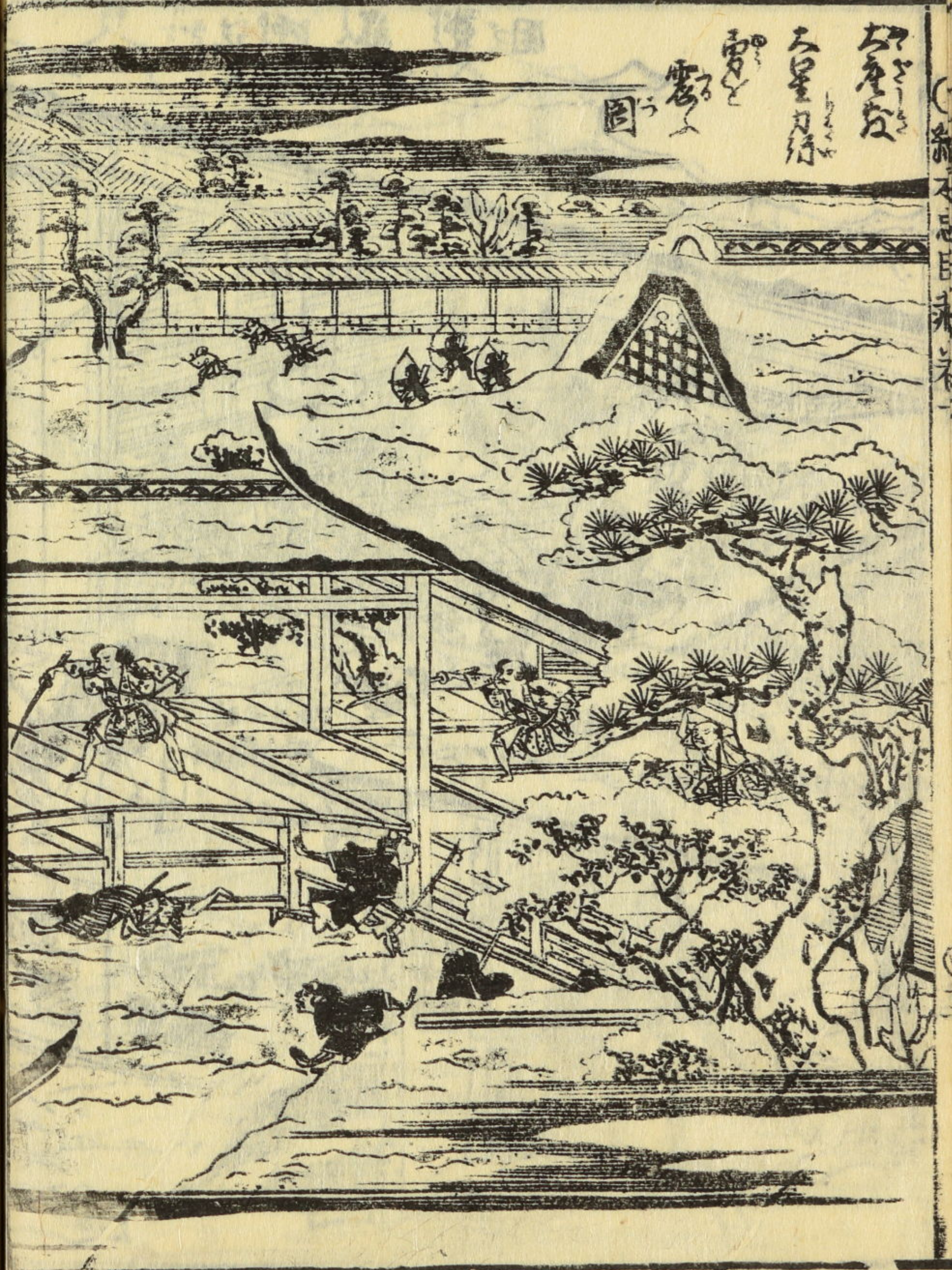


繪本忠臣蔵卷十

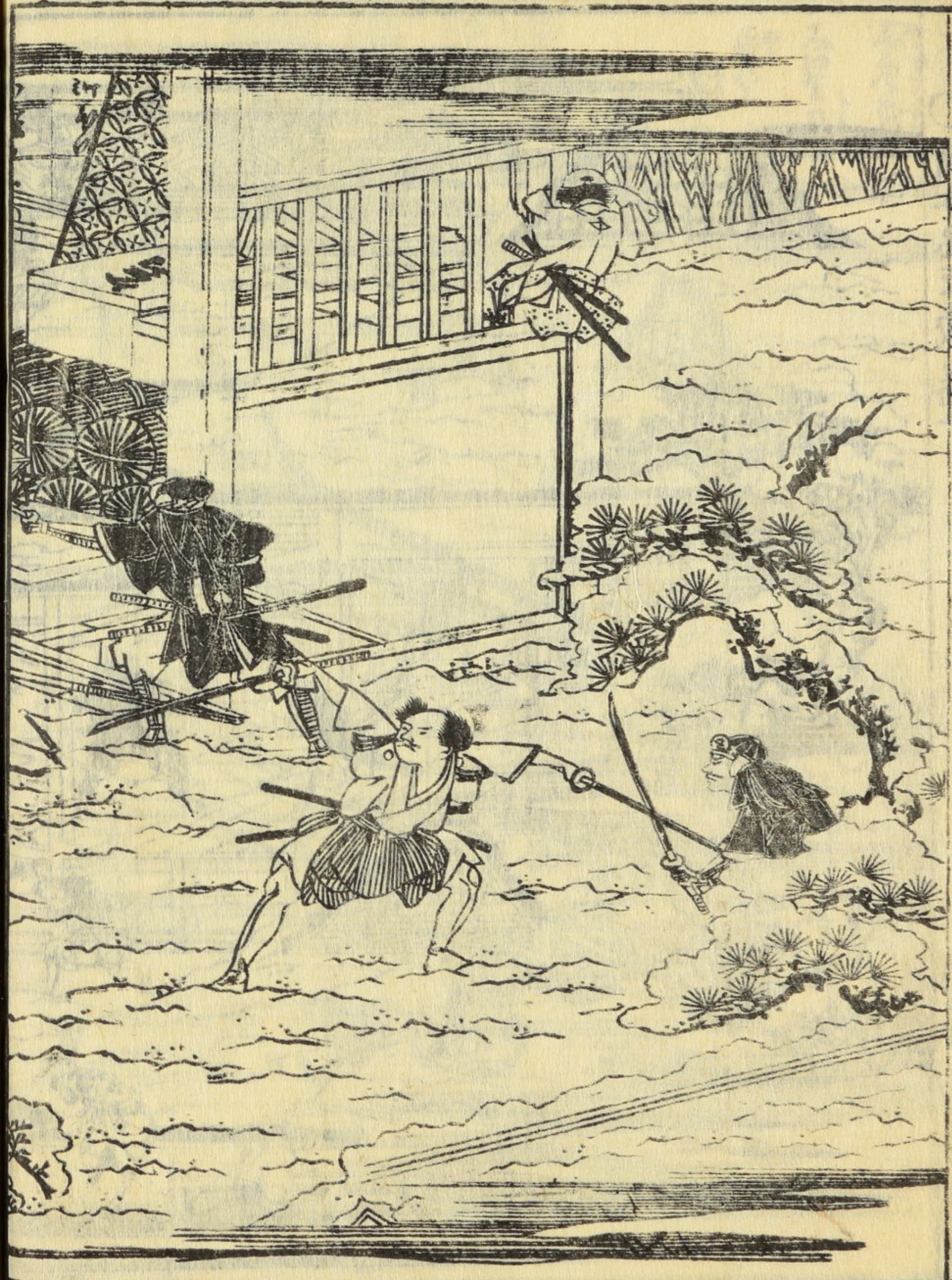
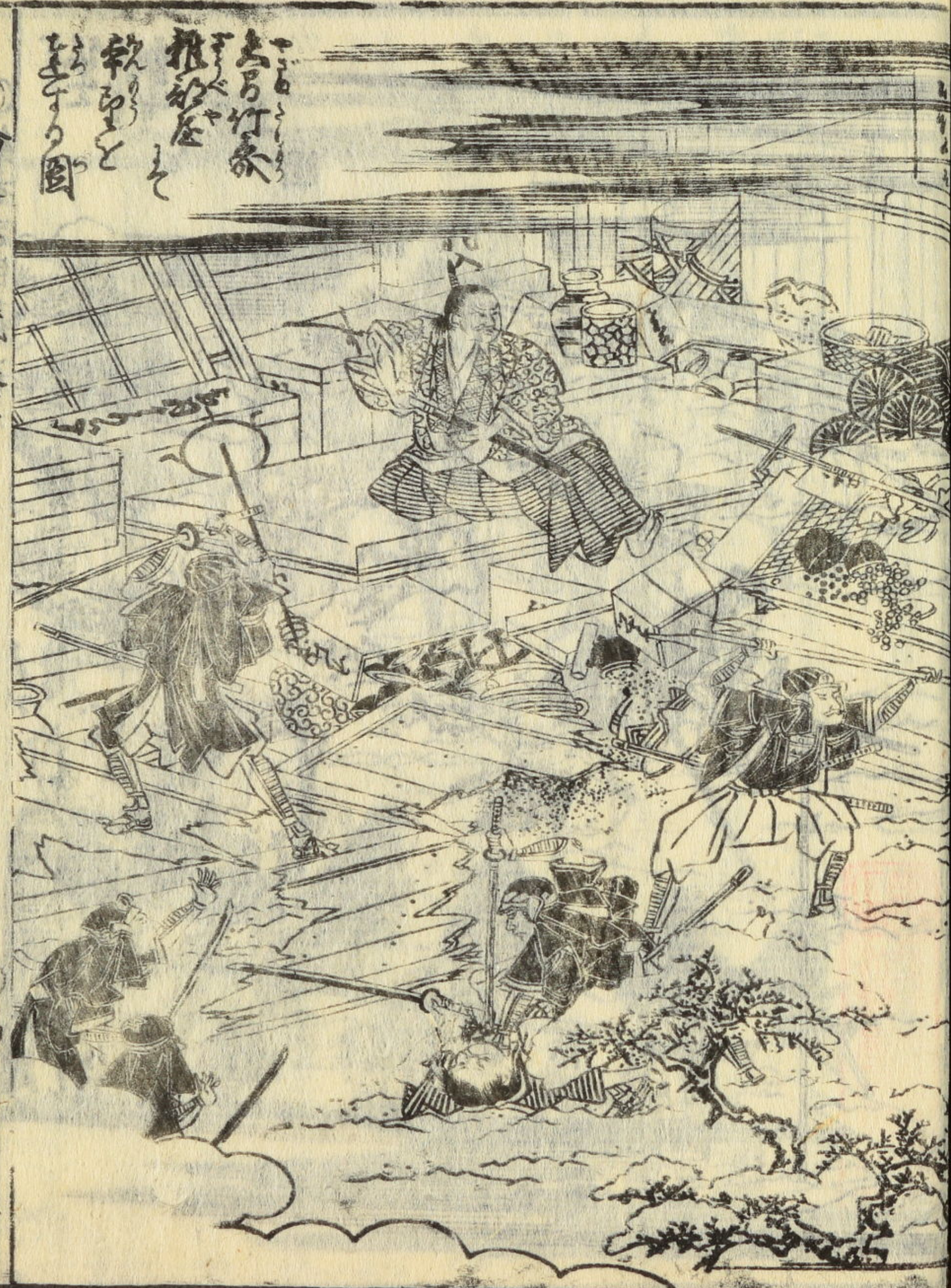
十

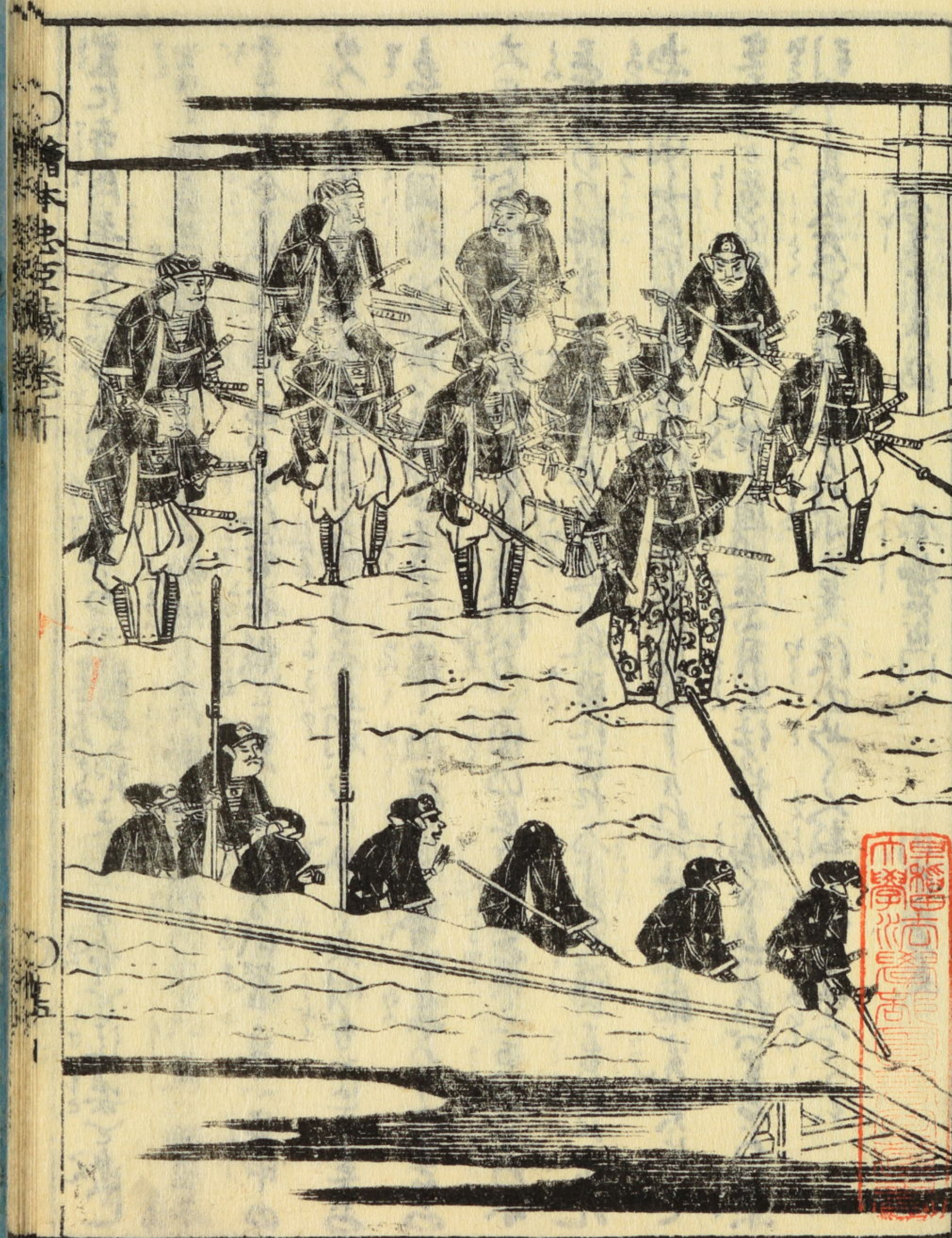


如左
 大星乃行
 雲
 圖



大乃竹家
推初屋
軟
まきり園





武田信玄

上



武田信玄
凱歌
揚子
圖

武田信玄
卷十

下

野に奇園平をらが才同名定ちらひ
 野の師並が門おと彼方けり
 其の宗會瓜僧一洗二思らた家書假と書て之ゆりけ答度ふ家中の
 めく亦も針おも多りそと轉り子且別おん成一六時分はとまを
 急だ二國播小流ゆりけ付子美士の路く彼播流小勢と集めりるを
 大星がふ小もそと也物音り彼門おと匂ひは亦も書ら二更のころ小
 長屋のり此車も三開と入送下れ並に込入るまは流りも針おん
 おも用大りり其餘性と事といはたてられは書り助完美とて
 更なるが書と附一はいし合一通り速し用去は長夜くそとわが定をら集
 引平一其支度とと形たる付小大星はのゆり人教と記其今とふ
 大星は良し助 原郷門 川原忠を美

遠東林上門

竹森病美

下山原をら

海井美を流

松村長平

津村二存をら

富六をら

勝田美をら

遠田美を美

芳田徳をら

園名慶美をら

小寺孝をら

海賀八をら

加頭美を七

立川幼を流

津賀良をら

園名浪をら

新野美を流

知賀松久六

大智文を吾

大前美を流

以上十四人と進子くまむ

石星力を弥

塩田美を直

不破美を流

本村園をら

芳田仲をら

小寺千を色

大間美を月

儀合美を流

海井美を流

大星は良し助

川原忠を美

玉橋侍助

行谷市右衛門

黒島伝次

松村半次

松野九平次

赤地延秀

柳島宗助

村中助助

遠田貞作

川原九郎

高橋伝次

早世弥助

太田新八郎

守園平次

此上五人は揃まつて名盛博と懇懇と申す此灯と燈子守屋は
おれんとおれおれいふと勝くやく此燈を包むるなり

諸士此燈が身中に押入

既に丑の刻よきて早七士の落し
表門は差向いしに頼平と申すに
時大早遠來旅をらすらびて
て来た来り入るい下下下
罫りやく表門より入るは
人教をて俄よ表門に向ふ
亭舟人は侍と見て云ふ怪
と始りおれいふと頼平と
所の相たうけ付て居立
来り家の棟小端りて中
雪は鐘と鳴る中つづき
会殿と鳴りけるもに續
下して表門と開くは
相夫と鳴るは二河助

繪本忠臣蔵 卷十一

時大早遠來旅をらすらびて

竹原を多八弁と云ひて極と折とあり一夜に逃入る田舎をり後田舎をり
 表に之り門を人々と宙に捲刀と御元と持付命情く門の鍵とたてし
 裏に門を人々をたてて鍵と中と表門と開け力跡が紐一日に聲を
 揃手ひ小おりゆ一派中一甲入有る而るの雷らの今度と云ふの如く
 さらした身中をた狼狽途次へかまふと御速ひらきと義士は四夜ふ
 人殺と擧げま川筋の中を摩半をり極大と云ひて玄園の戸と打破り
 毒た目録たる人故壇を利なる家来たる井氏に亡者の徳と報せられた
 向きの忍考にや出有る首と擧げりやと云ひて呼りく四方と圍へて殺
 せし板並をる陰及軒の垂水に之候事と云ひて擧げりゆの如く
 昨並の客由の若死肝と使魂は為るお合老をたたりと云ひて徳家の
 降仁本と云ひて昨並の家申深勅惟事小絶た目録車家と云ひて使申ふ

身へてとてた折合んと云ひたり小寺子也云々の行と源治をり極越と姓
 名はありては守り候利友と云ひて貞が苗士と云ひて今一月はと云ひて
 徳と後と云ひて夜討小推系はた中儀家と云ひて中儀と事はた大の利は
 西事と云ひて保一は隣家の事也やと云ひて如神と云ひて重なりと云ひて
 一と云ひて一は法をりしと云ひて保一は保一と云ひて保一は保一と云ひて
 多事と云ひて保一は保一と云ひて保一は保一と云ひて保一は保一と云ひて

義士師車が家士と云ひて

左軍中良助と云ひて玄園の正面と云ひて何れをりくと下かと云ひて
 何れをりて縁と云ひて我もくと実をりしと云ひて玄園の次のりた計と云ひて
 人枕元の刀追え抜連と云ひて保一は保一と云ひて保一は保一と云ひて
 突殺は是と云ひて保一は保一と云ひて保一は保一と云ひて保一は保一と云ひて

濱の谷に小休村二軒あり沼は國を磨ぐ者ありりて時井ヶ島及び小坂
 口をとりて多利孫の命と姓名を各棄り得物くと利托て切て入會をなさる
 人ふは六人越下とせしむるははるくも一一人の侍と云ふ京四割りは殺侍
 の怖るは残の土刀と引て近江と三河を尋のがに老と進てゆ義士の業
 事これ忘せし侍後のはく成物と懐物と拍矢と長下と一聞毎の役戸
 襖に五枚の完とさるしは完は白色のくくう侍をして働かせる事
 久長すまはるは主君の傍にゐる所の強とそく斬切の
 事すしひはるくとして味方の後と利は殺す 國を磨ぐ人老らハ部を小かす
 身より侍と稱するの神田が名同しし六年と助け侍たすと引ててをそ
 入にすまはるの間六義士十六人丸て切侍其侍音般番の軍兵は遠く
 なく聞七五坂門をらへて圓のたの方侍の体具は越越入はれ之流ら侍

大小と指眼りて奪りてとにせらるる多と氣神也が腹の久業白とにせ
 其方り命の助けをなせしといども今も持老慈たと秘めてももよはく作
 りなれ六門をら後と五死傷り六傷り之面侍と云ふりあく後のあひ
 と下と向てぞ殺しり不破若お切の名人成べ侍侍り兼とあつたは
 侍を身死る門をらお形もも調て之業をに能切く先へて三河
 と名ぶ無の勅奉行河のやんもも海に五破の侍と思ひ持してより切味と云
 一海かて人んも強をてしあた勅所之をお能に八代ゆきあつた侍
 侍に死居りて敵と雖も切り也云師直と云はせたと云ぐ内小涼使
 と名ぶ良と云はねと信長成人殺し打殺し八五士奥下切て入切ら不之の
 方分侍五人橋連新其跡八命を棄忠を命被永長と云ふ十一は
 之に居ら丸松山三たると名棄て流らるる吉江にあら小寺千内國重之

川津丸丸命 堀井毎也力を久田を奪ふに敵に流り合大荒と敵に切流
 ぶ流るなりと来るし流り合に敵に流り合大荒と敵に切流
 追ふもあまきくばを命が小美先より願正切下れいふ中 俗に依りては命
 孫命より合孫命も命と種下一足引は働くも流石のさふ命も汗と
 切とて切流の園中血まながし流るの是と敵に下りたる命も切とて
 至りてゆかたにいふく一多嘆と踏込てお付小孫命が自らの中より
 か件別三ふれん是とて流る中入大の小孫命真とて進今ふ
 堀井も久田の勇士進下おとて進て行板取兵をらる者居にふ中
 久ら向ふ流るより水と流久田を奪ふ後おは長久四殺しえ仕松
 是とて命に頼りて進てゆかたにいふく一多嘆と踏込てお付小孫命真とて進今ふ
 堀井も久田の勇士進下おとて進て行板取兵をらる者居にふ中
 久ら向ふ流るより水と流久田を奪ふ後おは長久四殺しえ仕松
 是とて命に頼りて進てゆかたにいふく一多嘆と踏込てお付小孫命真とて進今ふ

あゝ士勇氣ちのじき

大甲力流 身 撫子の大の成し其性徳勇の壮士に六面一の物もよ浦
 敵兵の招捕と小奇秀田 儂り流流に実入んふより向ふ堂折に命檢
 命に討むる安を成感力流何人必と流をを流をわんて一実利兵兵官
 重剣と負流小光くくく入るも大流流命と名乗刀と名乗刀と向ふく
 勢りて切流力流小奇のやく飛上り飛遠て切流互にすめり壯士成はり
 ろるるもくもく入りり力流流と捨て刀と捨て切流大流流流るも負
 刃是んとくもく力流流流と捨て丁ど切流流流んて一実なる力流
 刃と横振に挿へく大流流と眼を首めさうと流るるを流流して芳田
 仲たつ日名はをら小奇孝をら味村を命をらる所孫命亦地延流るも場

内へ隠れ居りしつと見えてもとまふがおもあり其後引りたると
 主関とて案内と申言助是と人付未清ふ白ひ下下の兵引に集り
 今やくと相打ちなり此一思ひ欲ふまごをたつ関戦すなりと見え其後の
 牙形が家の内におきて是若と申言せりやをいともとるが地井が家へ
 かり中へ利まきとて件よりいふに二人の程もは解りていふに
 知者いふにいふに心よめて勇氣燥然として見えよをきり建引提
 是若ども後けとて是と目録てまの行の獅子の長なるに是若ども後て
 伊左衛門とて地井九十良大星二年あむくと切合んは有量と割止ま
 武勇作少恥とては去るおのれは他人と陣をこしはくぬち下下
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と
 伊左衛門とて地井九十良大星二年あむくと切合んは有量と割止ま
 武勇作少恥とては去るおのれは他人と陣をこしはくぬち下下
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と
 伊左衛門とて地井九十良大星二年あむくと切合んは有量と割止ま
 武勇作少恥とては去るおのれは他人と陣をこしはくぬち下下
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と

知賀松右田傳五郎と武上

却況する侍連は其性気成り重く隠れ仕の侍とていふはけいあむん
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と
 伊左衛門とて地井九十良大星二年あむくと切合んは有量と割止ま
 武勇作少恥とては去るおのれは他人と陣をこしはくぬち下下
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と
 伊左衛門とて地井九十良大星二年あむくと切合んは有量と割止ま
 武勇作少恥とては去るおのれは他人と陣をこしはくぬち下下
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と
 伊左衛門とて地井九十良大星二年あむくと切合んは有量と割止ま
 武勇作少恥とては去るおのれは他人と陣をこしはくぬち下下
 程小出ひまぐ屋敷の白りよとて勢斗ひひとて陣と合らねが玉是と

又下へは美士の存り多邊しく舞中の日の男を愛して居りては母に
 大星子知りて欲成べけれを一なき者か人近き事なれば一介く男に
 眼と配てをれ長をよめ老とてはあらん母と因り戸と鳴くはら
 一人もある者なく種りゆつて雲の居る雲の中通りの向ふは廊より舞
 磯谷連入上筒柄を黒袴赤帯とて刀をねども向ふ園入して如れ
 かく事なるとるも守御の事なりと村にたれども四より物事は折給
 九命折三折定し近長河とて舞うあつて事人子母をりて折る力とじて
 切落す双方極威と申の男と雲人て舞殿に磯谷捨るらと退きて折
 と目けて下り村に折折と村通らん後をいれぬるりかろお大の
 男通うも折折とめて折付にま六尺敷礼とて義士もが目の中へ入候
 老をいれりしが黒袴赤帯をたぬ思つ階段で彼者と儲と切し辰辰、
 とてとんく下へ候つて相と二守斗りて切せりて折入し思れぬ事と
 此身の上目よりとあそゆにり磯谷連入と折て折る五折り後れを
 後より切られ二人尻衣に傷れ伏せ打受ひあつて傷も成るはけり事通真
 と見えり 三折て切て入又事知松も六尺奥と折て進へ入る度なれ
 左衛門内侍と名乗る方かろ 戸に立塞り候と入をいれとて事知松
 妻と無く天候候や具列れとて之りをて切落す双方柳子の言をり命を
 唐斎よりも軒より流る方とてあつて折やり磯谷松を是と助へぬり之
 知松もは渡り一彈のわて切せしよあつては左衛門内侍と切下り候は
 様より流り候と折て進へり知松の何とて進落るは折る知松
 候つて座中の泉水に折れ流るなり知松と左衛門内侍と折て海下
 知松と切られと折落ると言ふれがなで流る中へ入りて大星とて

今更には藤原の族も成りて、そのついでに、
と打破りて、天孫の下のついでに、
わが天孫も、天孫のついでに、
持てたついでに、
成りて、
今更には、
くは、
の御の御も、
多くも、

義士達を望

実には、
候り、
内、
雅、
二、
重、
倫、
を、
知、
下、
び、
更、

夫夫八代書て時世が前代より中身介判りまが中絶して首と名を字
 使とせむと名士の名とを連中世のるんぬり首と名の上を二身念例
 よ育る長刀の如に致しやも物とゆふ事國平たるとも此上置後人
 中世の次のらんまを統一統へ平世くは付中世也 首よ向く事二月
 十四夜を國に移て入る員何ゆと中絶くすやむ傷友及びお押ぬの
 方中絶てと員奉名とまへた河場也とまざる事河移後付は首
 も員天切後伯州の捕獲り下ん事申の老どと誰は付早も員か未だの
 妙名の程をかくくゆりぬる事奉名と後と今候時所を未だ中絶この
 中絶とくすへ推系付下よ中絶のゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆり
 まる中絶とくすへ推系付下よ中絶のゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆり
 り員か未だの河場也とまざる事河移後付は首
 り員か未だの河場也とまざる事河移後付は首

中絶とくすへ推系付下よ中絶のゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆり
 まる中絶とくすへ推系付下よ中絶のゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆりゆゆり
 り員か未だの河場也とまざる事河移後付は首
 り員か未だの河場也とまざる事河移後付は首

（左）

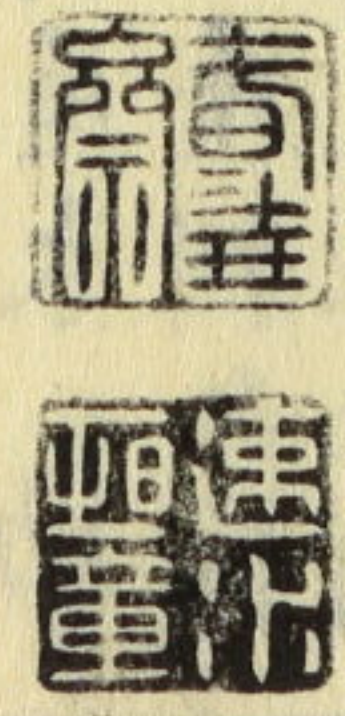
（右）

道後ちんごんのせふり忠孝の教もりる巻

諸士奉末の卒志と起し忠義の巻とありし忠成寺一山ありて道後の
お牙教友が卒志と起し一山ありて道後のお牙教友が卒志と起し
の忠義と同一山ありて道後のお牙教友が卒志と起し
の下とありて道後のお牙教友が卒志と起し
報復の回音ありて道後のお牙教友が卒志と起し
る名三川が卒志と起し道後のお牙教友が卒志と起し
妻小守京が卒志と起し道後のお牙教友が卒志と起し
お苗寺が卒志と起し道後のお牙教友が卒志と起し

繪本忠臣藏卷之十之尾

平安 連水春曉齋画圖



武 忠義太平記 平かた繪へ 全部六冊

いまの世良し助と早七士と忠義報復の始末と記す事あり
實永奉中の松行流布仕あり

繪本忠臣藏後編 全部十冊 近刻

此編は諸士奉末と起し一山ありて道後のお牙教友が卒志と起し
并に諸士の傳も其先きた編一面白と事と起し一山ありて道後のお牙教友が卒志と起し

寬政十二年庚申初夏刻成

浪華書林

皇都書林

柏原屋重兵衛
 河内屋太助
 今津屋辰一助
 柏原屋庄一衛
 扇屋利助
 著屋善助
 菱屋治衛
 吉野屋為八
 圓屋源即
 松阪屋儀兵衛
 長村屋太助
 錢屋利兵衛
 菱屋孫兵衛

○繪本藏版目次 皇都書林 三條街 吉野屋仁兵衛

繪本平泉實記 前後十二冊 靈狐繪本雙忠錄 十冊

義久軍談 鎌倉太平記 前後十二冊 茶店墨江草紙 九冊

寒燈夜話 小栗外傳 自初編至三編 十八冊 繪本頭勇録 十冊

繪本金花談 十二冊 自來也說話 前後十一冊

同 彦山靈驗記 十冊 相馬將門總援借語 自初編至三編 十五冊

同 金毘羅神靈記 十冊 則定仁勇傳 八冊

同 箱根靈應傳 六冊 安倍仲唐輪迴物語 五冊

同 義勇傳 六冊 小野薑一代記 八十鳴影 十冊

同 孝感傳 十冊 蛭少女玉取草紙 七冊

繪本藏版目次

三十四卷

長柄長者鶯塚

六冊

繪本一休譚

六冊

三三間堂
棟抄奇傳 柳り糸

五冊

河内未綿團七編

六冊

河内未綿團七編

五冊

三竹
美談 檀風物語

五冊

小説峯の吹雪

五冊

信本發切傳

六冊

推入
小紫 毎双いり世語

五冊

中將姐一代記

平入
重入 五冊

繪本浪系男

五冊

同本行状記

行状
七冊

管語波の露

六冊

一休くま

狂入
三冊

繪本羽衣譚

六冊

新吟笑の友

五冊

報仇親子墳

六冊

けりく粹り川

五冊

孝子
美談 唐り糸

六冊

花街風流解

三冊

繪本雪鏡談

十一冊

新編女水滸傳

六冊

同 二嶋堪男記

十冊

繪本孝女誓

三冊

同 龜山話

十冊

同 鮎の腹帯

三冊

同 沉香亭

十冊

新撰勸進躰

五冊

小野小町一代記

六冊

廓中旦除

五冊

鏡山列女功

五冊

教訓の女州

初篇
二篇
三篇 各十冊

復讐琴松譚

六冊

同 や州

初篇
二篇 各二冊

同 武逸談

三冊

同 かし州

二冊

阿波の鳴門

六冊

釋迦八相物語

合巻 五冊

源午漆合州

五冊

同 一代記

二冊

